

東北大学附属図書館報

木這子

BULLETIN OF
THE TOHOKU UNIVERSITY LIBRARY

—木這子（きぼこ）とは東北地方の方言で、こけしのこと。小芥子這子（こけしぼうこ）—

目 次

○シリーズ 貴重図書18—東北大学附属 図書館所蔵 『森潤三郎氏旧蔵米原文書』 —伝来についての予備的考察—…………… 1	○海外電子図書館機能調査記……………11
○工学分館長に就任して…………… 7	○平成12年度システム地域講習会の開催……………17
○平成12年度東北大学教育研究協力基金事業 「図書館における電子的授業支援に関する 調査及び開発」について…………… 8	○附属図書館商議会商議員名簿……………18
○第31回国立大学図書館東北地区協議会総会……………10	○人事異動……………19
	○会 議……………20
	○お知らせ……………20
	○編集後記……………20

シリーズ 貴重図書18

東北大学附属図書館所蔵

『森潤三郎氏旧蔵米原文書』—伝来についての予備的考察—

東北大学大学院文学研究科助教授 柳 原 敏 昭

I 鷗外ゆかりの人々の手から

森潤三郎氏旧蔵米原文書（以下、東北大米原文書と略す）は、1965年2月に森富医学部教授（当時）のもとより附属図書館の所蔵に帰した古文書を中心とする史料群である。森富氏は森鷗外の令孫（鷗外の長男於菟のご次男）、潤三郎は末弟にあたる。本文書は、文豪鷗外ゆかりの方々の手を経て附属図書館に架蔵されること

となったのである。

旧蔵者の森潤三郎（1879-1944）は、東京の生まれ。東京専門学校（現早稲田大学）卒業後、東京帝国大学史料編纂掛（現東京大学史料編纂所）に勤務、その後、京都府立図書館に転じ、再び東京に戻って史料編纂掛等で図書整理に携わった。専門とするところは書誌学・考証学で、『朝鮮年表』（春陽堂、1907）、『紅葉山文庫と

書物奉行』(昭和書房, 1933), 『多紀氏の事蹟』(日本医史学会, 1933)等の著作がある。また, 兄鷗外に関して『鷗外遺珠と思ひ出』(森於菟との共編。昭和書房, 1933), 評伝『鷗外森林太郎』(丸井書店, 1942)をのこしており, 特に後者は鷗外研究の基本文献として名高い⁽¹⁾。

II 米原氏

次に米原文書を伝えた米原氏について記しておこう⁽²⁾。

米原氏は, 六角氏の一流で, 近江国(現滋賀県)から起こったとの所伝をもつ。室町時代後期には出雲(現島根県)に移住し, やがて高瀬城(現簸川郡斐川町)に拠って戦国大名尼子氏の家臣として活躍する。そのころの当主を米原平内兵衛尉綱寛^{へいないひょうえいのじょう}という。この人物は一時, 毛利氏に与したこともあったが, 最終的には尼子方に属し, 主家の衰亡とともに没落を余儀なくされた。

江戸時代にはいると, 綱寛の嫡子綱俊が因幡国鹿野(現鳥取県気高郡鹿野町)で亀井政矩に仕え, その子綱貞の時に亀井氏の転封にともなって石見国津和野(現島根県鹿足郡津和野町)に移った。この綱貞が津和野米原氏の初代で, そこから数えて10代目にあたる綱善^{つなみ}のときに明治維新を迎えた。米原文書はこの家に代々相伝されてきたのである。

ところで, 米原家と森家とは大変に深い関係にあった(略系図参照)。森家が津和野藩典医の家柄であったことはあらためて説明するまでもなからう。幼少のみぎり, 鷗外は藩校教授であった米原綱善の教えを受けている。実は, 鷗外の祖母於清は綱善の養母於千代の姉であったから, 当時すでに両家は姻戚関係にあった。そして潤三郎は綱善の娘静子を妻としているのである(静子は結婚後, 思都子と名乗る)⁽³⁾。思都子は, 綱善夫妻の一人娘であった。結婚後一時森家の籍に入ったものの, 綱善の養子が離縁になったため間もなく姓のみ米原に復したという⁽⁴⁾。このような事情から, 米原文書は潤

三郎・思都子夫妻の所蔵となったのである。

【森家・米原家略系図】



III 東北大米原文書

1944年4月, 津和野への疎開準備のさなか潤三郎は急逝した(享年66歳)。妻思都子のみ故郷へ帰ったが, 跡取りがなかったため, 富氏が後嗣となった。1963年1月, 思都子の葬儀に際して, 富氏はその一切を取りしきり, 故人が大切にしていた文箱と紙箱に入った古文書や書簡類を引き継ぐ。そのうちの文箱(津軽塗であったという)に納められていたのが, 後の東北大米原文書であった⁽⁵⁾。それから2年後, 同文書が富氏の手より附属図書館に移されたのは前述の通りである。

なお, このあたりの事情に関しては, 森於菟「砂に書かれた記録」⁽⁶⁾に次のようにある。「思都子は米原綱善夫妻の一人娘であったので, 森家に嫁してもその籍は米原静子のまま歿したのであった。その最後まで父綱善の形見と秘蔵した古文書の中に戦国時代のものがあつた。富の依頼で東北大学の文学部の権威者が調べた中に, 価値あるものがあつたとやら」⁽⁷⁾。

東北大米原文書は, 古文書⁽⁸⁾53通その他から成り, それぞれの史料は(古文書は一紙ごとに)特製の封筒に収められている。1965年2月に作成された目録は, 史料番号を58まで打つ。全体は大きく米原氏に相伝されてきた部分とそれ以外の部分とに分かれる。

前者は, 古文書と系図一卷(佐々木米原世系之図), 由緒書一冊(九代綱定が初代綱貞以来

の由緒をまとめたもの)、書判帳一冊(亀井氏等の発給文書の署判集)等から成る。これまで小文で米原文書と呼んできたものはこれを指す。

後者は、潤三郎が収集した古文書である。潤三郎は、相当な古文書・古典籍の収集家であつたらしく、牽舟の雅号をもち、そのコレクションを牽舟文庫と名付けていた。東北大米原文書には、潤三郎の差出しのある私製の葉書6枚が含まれており、それらには牽舟文庫所蔵の古文書や古写本が印刷されている⁽⁹⁾。そのうちの一片の宛名には与謝野晶子と記されており、潤三郎の多彩な人間関係の一端をしるのばせる。



「小堀遠江守政一書状」写真を印刷した葉書(小堀遠江守政一は小堀遠州のこと)。この書状は「江州観音寺文書」の一で、現在は東北大米原文書に含まれる。左下に「牽舟文庫蔵」と見える。森富氏によれば、蔵書印は金沢文庫の印を模したものという(写真には写っていない)。

古文書で最も古いものは、米原氏家伝文書・収集文書を通じ観応2年(1351)2月15日付「足利義詮官途吹草状」である。年欠の書状が多く、なお検討が必要であるが、時代がくだるものは幕末に及ぶと考えられる。

中世文書は7通あり、そのうち3通が戦国時代の米原氏に関するものである。表1の2・3「尼子義久知行宛行状」は二つとも米原右馬允に宛てられている。この人物は前掲綱寛の弟綱忠で、兄が毛利方に寝返った後も尼子氏に従っていたため、それを賞されて所領を宛行れた。表1の4「尼子勝久知行宛行状」は、尼子方へ復した綱寛に所領を給付するという内容である⁽¹⁰⁾。その他の中世文書は、潤三

郎が収集したもので、いわゆる「天下布武」印を捺した織田信長朱印状(表1の6)などが含まれている。

【表1 東北大米原文書の中世文書】

- 1 観応2年(1351)2月15日 足利義詮官途吹草状
- 2 永禄6年(1563)3月1日 尼子義久知行宛行状写*
- 3 永禄8年(1565)7月26日 尼子義久知行宛行状写*
- 4 永禄12年(1569)11月13日 尼子勝久知行宛行状*
- 5 天正3年(1575)3月15日 田地売券
- 6 天正3年(1575)11月7日 深草内配当分目録
- 7 天正14年(1586)1月9日 義兼書状

*印は米原氏家伝文書、それ以外は収集文書。



永禄12年(1569)11月13日「尼子勝久知行宛行状」(表1の4、表2の14)



天正3年(1575)11月7日「深草内配当分目録」(表1の6)。印判は織田信長の「天下布武」。

IV 東大史料編纂所影写本、松原文書との比較
東京大学史料編纂所には、森潤三郎旧蔵(あるいは保管)文書の影写本(原本に忠実な写)

が架蔵されている⁽¹¹⁾。すなわち米原文書・森潤三郎氏所蔵文書・江州観音寺文書の三つである（以下、この三つを総称する場合は「影写本」とする）。影写の時期は、それぞれ1929年10月、同11月および1914年10月である。

米原文書は屢述の米原氏家伝文書。この文書のみ「森潤三郎氏保管」とされているのは、真の所蔵者が思都子であったからであろう。森潤三郎氏所蔵文書は文字通り潤三郎が収集したものである。江州観音寺文書は芦浦観音寺（現滋賀県草津市）に伝わった文書。小堀遠州と彦根藩主井伊氏の発給文書を中心に収集されている⁽¹²⁾。これら「影写本」は潤三郎の存命中に作成された、いわば東北大米原文書の原型を示すものといえよう。

一方、米原氏に関する古文書としては、滋賀県米原町^{まいはら}所在の松原文書が知られている。この文書を伝えた松原家は米原氏の末裔とされる。文書の総点数は7点であるが、中世米原氏の姿を追うことができる貴重な史料である。昨年、『米原町史』資料編（米原町史編さん委員会）が刊行され、利用の便がはかられた。

さて、「影写本」の米原文書は古文書21通・書判帳1・系図1・綱寛事跡書上1・その他2、森潤三郎氏所蔵文書は古文書7通、江州観音寺文書は古文書17通から成る。すぐに気がつくように、史料の点数が東北大米原文書と相違している。しかも共通するのは古文書11通（米原文書5通、森潤三郎氏所蔵文書2通、江州観音寺文書4通）と米原氏関係の書判帳・系図のみである（系図もよく見ると記載が異なっている）。逆に、「影写本」にあり東北大米原文書に含まれていないものは古文書34通（米原文書16通、森潤三郎氏所蔵文書5通、江州観音寺文書13通）であり、東北大米原文書にあり「影写本」にないものは古文書だけで42通にのぼる。先に「影写本」は東北大米原文書の原型を示すとしたが、意外にもその内実はかなり異なっているのである。「影写本」が作成された大正・昭和初期から本学図書館の架蔵となるまでの間に、

新たに文書が収集されたり、あるいは他に移されたりといったことがあったと考えねばなるまい。森於菟は潤三郎急逝後の状況について、「叔母思都子は跡の始末をして実家の郷里津和野町に帰るために、叔父（潤三郎＝引用者）の集め所蔵したものを古本商、骨董商の手に渡した」と記す（「砂に書かれた記録」前掲）。また、『考証学論攷』解説（朝倉治彦氏執筆）には、「蔵書は、無窮會神習文庫に寄贈されたと聞いているが、これは全部ではないらしい」とある。おそらくこうしたことも関わっていたに違いない。一方、史料編纂所による史料採訪に漏れがあった可能性もあろう。

このように東北大米原文書と「影写本」との関係は一筋縄でいかない問題を含んでいるのである。実はこのことは、「影写本」と松原文書、松原文書と東北大米原文書との関係についてもいえそうである。ここでは、中世の米原氏関係文書を対象をしぼって、三つの史料群の比較を試みたい。

そのために作成したのが表2である。まず気がつくことは、やはり東北大米原文書と米原文書影写本との重なるの少なさである。7・10・14番以外の文書は受け継がれなかったということになる。

東北大米原文書と松原文書との関係については、写を含めて両者でまったく重複がないことを指摘しておく。実は、前掲『米原町史』資料編は、「仙台市の森富氏所蔵の『米原文書』」の中に「『松原文書』37-39号と同一内容の（永禄十二年）八月十二日付尼子勝久書状と（同年）五月十七日付大友宗麟書状がある」とし、また、「綱寛を充所とする文書が『松原文書』に残るのは、尼子氏の滅亡後、出雲米原氏の一族で、縁者の近江米原氏を頼って、近江に帰農した者がいるためであろう」とする。ここでいう森富氏所蔵の「米原文書」とは東北大米原文書のことであり、松原文書37・38・39号はそれぞれ表の13・12・11にあたる（「綱寛を宛所とする文書」もこれをさす）。しかしながら、これらの

文書は東北大米原文書中には存在しない。おそらく『米原町史』は、米原文書影写本と松原文書とを比較したのであろう。

そこで次に米原文書影写本と松原文書とを比べてみることにしよう。重複するのが上で問題とした11・12・13である。幸い先日、東大史料編纂所においてこの三文書の影写本と松原文書写真⁽¹³⁾とを比較検討する機会を得た。その結果、それぞれ法量（古文書の大きさ）・字形・字配りから、花押の形、封紙（文書本紙を包む紙）・切封（文書の端を紐状に切って、それで封をすること）・封のための墨引の様態等々ほぼまったく同じであることがわかった（図1参照）⁽¹⁴⁾。



図1 東大史料編纂所所蔵（永禄12年）8月12日「尼子勝久知行宛行状」（表2の12）影写本の形状。マイクロフィルム紙焼よりトレース。右から封紙、本紙。本紙の右端が切封の紐、その左の縦線が墨引（実際には裏にある）。法量は縦16.9cm×横44.4cm。掲載にあたっては東大史料編纂所より許可を得た。

以上は予備的考察の域を出ておらず、なお慎重な検討を要するが、松原文書の三通は正文であり、本来は潤三郎・思都子夫妻のもとにあった可能性が高いではなかろうか⁽¹⁵⁾。この点は、出雲米原氏と近江米原氏との関係を考える上での重要問題でもある。本格的な調査をまって結論を出したいと思う。

V おわりに

森潤三郎氏旧蔵米原文書紹介の任を与えられながら、文書の内容には立ち入らず、伝来関係について述べるにとどまってしまった。古文書の研究はまず伝来を明らかにすることから始めよという鉄則を念頭においてのことであるが、不十分であることは免れない。また、伝来についてもようやく問題の所在が明らかになったという段階である。今後さらに検討を続けることとしたい。

ところで、これまでも米原氏の家伝文書に言及した論著は少なくない。しかし、その主要部分が東北大学附属図書館所蔵となっていることはほとんど知られていないようである⁽¹⁶⁾。米原氏の歴史をたどる上でも、また關外ゆかりの書誌学者のコレクションを知る上でも非常に貴

【表2】米原氏関係中世文書の史料群別比較

	文書名（※は出雲関係のもの）	東北大米原文書	史料編纂所米原文書影写本	松原文書
1	康暦2.3.17 土岐康行通状	×	×	○
2	康正1.11.12 米原勝吉預け状※	×	○（花押）	×
3	永正1.10 伊庭範誠亮券	×	×	○（花押）
4	天文8.5.20 米原岩女・小二郎連署寄直状	×	×	○（花押）
5	永禄5.3.10 後藤賢豊判物	×	×	○（奥に伝達者多賀常陸入道の花押）
6	永禄5.8.17 尼子義久書状※	×	○（写）	×
7	永禄6.3.1 尼子義久知行宛行状※	○（写）	○（写）	×
8	永禄8.4.15 尼子義久書下※	×	○（写）	×
9	永禄8.8.15 尼子義久書下※	×	○（写）	×
10	永禄8.7.26 尼子義久知行宛行状※	○（写）	○（写）	×
11	（永禄12）5.17 大友宗麟書状※	×	○（花押、切封、紐欠、封紙、墨引）	○（花押、切封、紐欠、封紙、墨引）
12	（永禄12）8.12 尼子勝久知行宛行状※	×	○（花押、切封、封紙、墨引）	○（花押、切封、封紙、墨引）
13	（永禄12）8.12 尼子勝久書状※	×	○（花押、切封、封紙、墨引）	○（花押、切封、封紙）
14	永禄12.11.13 尼子勝久知行宛行状※	○（花押、後世の包紙）	○（花押、上書きなし封紙）	×

1) ○は存在すること、×は存在しないことを示す。

2) 3は4の連券。

3) 松原文書13の形状については、注(14)参照。

4) 6～10は米原綱忠宛、11～14は同綱寛宛。前者の正文が伝わっていないことに注意。津和野米原氏は綱寛の直系で、その関連の正文を受け継ぎ、一方、綱忠関連のものは写を作成し、保持していたのみであるということを示すと考えられる。

重なる史料群である。このささやかな紹介が機となり、多くの方々に関心をもっていただければ幸いである。

- (1) 森潤三郎の経歴については森富氏よりご教示を受けた。また、森於菟『父親としての森鷗外』（筑摩文庫、1993）、小金井喜美子『鷗外の思い出』（岩波文庫、1999）に関連する記述がある。『鷗外遺珠と思ひ出』復刻版（日本図書センター、1987）の解説（長谷川泉氏執筆）も参照。鹿内浩胤氏からも情報を寄せていただいた。なお、戦前、森潤三郎という音楽評論家がいたが、別人である。
- (2) 藤岡大拙「米原氏について」（同『島根県地方史論攷』ぎょうせい、1987。初出は1983）、細川涼一「近江米原氏と尼子勝久」（『日本歴史』588、1997）による。この二論文をはじめ出雲米原氏については長谷川博史氏よりご教示を得た。記して謝意を表したい。
- (3) 森家と米原家との関係については、森富氏のご教示を得たほか、森於菟前掲書、図録『森鷗外 明治知識人の歩んだ道』（森鷗外記念館、1996）によった。図録については、堀智美氏のご教示を得た。
- (4) 森於菟「観潮楼玄関番列伝」（森於菟前掲書。初出は1962）。
- (5) 以上、森富氏のご教示による。
- (6) 森於菟前掲書所収（初出は1965年10月）。
- (7) 続けて「古文書ずき珍書ずきの叔父が、霊あらば喜んだらうというところだが私にはあまり興味が無い」とある。なお引用文中の「東北大学の文学部の権威者」とは豊田武教授（当時）のこと。
- (8) 特定の相手に特定の内容を伝達するために文字で書かれたものと定義しておく。
- (9) 「写本新式目 伊勢貞丈自筆奥書」「金沢文庫旧蔵 禅林類聚 零本」「小堀遠江守政一書状」「古写本 朗詠要集上巻 藤貞幹自写」「斎藤彦磨自筆稿本」「金剛界降三世五重結護一帖」。これらは京都時代（1909～1918）に収集されたもの。森潤三郎「菟書余談」（日本書誌学大系9『考証学論攷』青裳堂書店、1979。初出は1936）に収集にまつわる回顧談があり、大部分の史料について同「古書閑談 家蔵古書解題」（同、初出は1931～33の間）に解説がある。『考証学論攷』は、潤三郎の書誌学的業績を集成したもので、前掲『多紀氏の事績』も併収する。

00 以上、藤岡大拙前掲論文参照。

- 01 東京大学史料編纂所架蔵の影写本に関しては、金子拓氏より多大なご教示を得た。記して謝意を表したい。また、その閲覧に際し遠藤基郎氏のご高配を賜った。以下に述べる考察については羽下徳彦氏・入間田宣夫氏からのご示教いただいている。
- 02 東京大学史料編纂所には蘆浦観音寺文書写真版が12冊架蔵されている。したがって潤三郎が収集したものは、観音寺文書のごく一部である。潤三郎は対馬以酩庵文書も100通余所蔵していたという。これらの文書については前掲「菟書余談」参照。
- 03 松原善右衛門氏所蔵文書（滋賀県坂田郡米原町 米原 松原善右衛門氏所蔵）。撮影は1961年5月。
- 04 表2の松原文書13写真にはスケールが写っておらず法量が判然としない。また裏の写真がなく墨引の確認ができなかった。とはいえ、影写本がこれとは別な文書から作成されたことを示す徴証もない。
- 05 鈴木茂男「文書がはがされた話」（『古文書研究』6、1973）が論及した南部文書と斎藤文書との関係が想起される。川嶋茂裕氏のご教示。
- 06 『古文書研究』3（1970）に簡単な紹介があった（安藤重雄・入間田宣夫「東北大学所蔵の中世文書」）。

【付 記】

物故された方々については敬称を略させていただきました。

【謝 辞】

本学名誉教授森富先生からは、私信を通じて貴重かつ多大なご教示を得ました。末筆ながら記して、先生のご厚意とご学恩に対して心より御礼申し上げます。

工学分館長に就任して

工学分館長 宮 崎 照 宣



本間基文前分館長の後任として4月1日付で就任しました。工学分館は、昭和53年に創設され、図書行政の集中化を開始し、平成7年の分館増築を期に、全ての学科の図書室が

なくなり、平成8年度までに分館への集中化が完了しています。分館の運営状況を理解するため、過去約10年間の蔵書及び利用者数等の推移を図に示しました。蔵書は、昭和53年以降正確に4,500冊／年の割合で増加し続け、平成9年には31万冊以上となりましたが、各学科から集めた重複雑誌を平成9～10年かけて破棄したため、現在28万数千冊です。現在の図書収蔵能力は約28万冊ですが、蔵書の約20%が教官研究室に長期貸し出されているため、それに相当する分、収納の余裕があり、向こう約10年間は何とか対応できる見通しです。しかしながら、購入雑誌の種類、利用者数も確実に伸びていること、更に簡単に増築できないことを考え併せると、集密書架方式の導入及び蔵書の取捨選択によるスペースの確保は重要な課題です。また、図で奉仕対象者が平成6～7年にかけて約2,000人増加しているのは、教養部の廃止に伴って1、2年生も工学部の所属としてカウントしたためです。このことは実質的な利用者数の増加につながっていると考えられます。

以上の問題点は、分館独自で対応していくことにより解決しなければならないと思います。これに対して、本館あるいは他大学の図書館等と協力しながら考えていかなければならない問題があります。その第1は電子ジャーナルの問題です。近い将来、研究者はいちいち図書館に赴くことなく、居ながらにして文献の検索、コピーが可能となることを望むでしょう。しかし、得たい情報は多種多様であり、研究者ごとに異なるため、ジャーナルの選択、経費の負担の方

法等解決しなければならない問題が山積みしています。第2には雑誌の高騰です。とくに外国雑誌のそれは目に余るものがあります。最近のエルゼビア・サイエンス社の一方的な学術雑誌価格政策については、35%以上の大幅な値上げとなるため、七大学図書館長の連名による要望書を出し、訂正を要求していると聞いています。この問題で考えさせられるのは、依然として外国雑誌は一流、国内雑誌は三流的な考えです。雑誌のサーキュレーションをあげるため、英文で論文及び本等を書くことは必要ですが、外国の出版社を利用しなくとも、国内のそれを利用することもできます。評価ばやりの昨今、インパクトファクターの高い雑誌に論文を投稿したい気持ちは理解できますが、国内雑誌に投稿し、これを盛り立てることは、学術雑誌の不当な価格策定を防ぐことになり有益です。

いずれにしても、工学分館の運営は長期的視野に立って行なわれるべきと考えます。運営委員、分館職員の皆様とともに微力ながら努力致します。関係各位のご支援、ご協力をお願いする次第です。

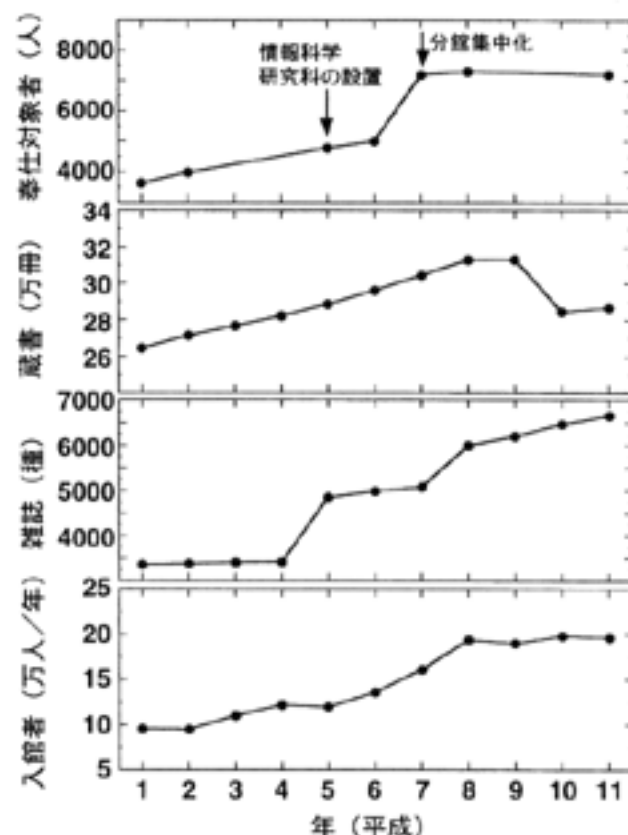


図 平成元年以降の工学分館の状況

平成12年度東北大学教育研究協力基金事業

「図書館における電子的授業支援に関する調査及び開発」について

情報サービス課長 早 瀬 均

はじめに

標記プロジェクトについて平成12年度東北大学教育研究協力基金による助成を申請し、採択された。この事業は、図書館が昨年度とりまとめた『東北大学附属図書館の将来構想』のなかで、教育支援サービスのひとつとして提言されている電子的授業支援に関連するものである。このサービスは、海外の大学図書館においては実施例があるものの、わが国においてその例がないため、実施にあたっては、「十分な検討を要する。」こととしている。それゆえ、本学においてこのサービスを実現するために種々の調査とプロトタイプシステムの開発を行おうというのがこのプロジェクトである。

電子的授業支援とは

電子的授業支援（Electronic Course Reserves: ECR）とは、海外の大学図書館で基本的なサービスとして実施されているコースリザーブの電子版である。コースリザーブは、授業で使用する文献や講義録、シラバス、宿題、試験問題等を通常リザーブデスクという窓口で別置、保管しておき、学生の利用に供するもので、利用が集中するため、貸出時間は2時間程度に限定されている。コースリザーブはこのように物理的な制約が多いため、その制約を解消しようというのが ECR である。（図1を参照）

背景・目的

大学審議会の『21世紀の大学像と今後の改革方策について（答申）』（平成10年10月）において大学改革の理念を実現するための方策として教育方法等の改善が提言されている。すなわち、
「現在の単位制度は、教室における授業と事前・事後の

準備学習・復習を合わせて単位を授与するものであり、学生の自主的な学習が求められる。このため、教室における授業だけでなく、授業の前提として読んでおくべき文献を指示するなど学生が事前に行う準備学習・復習についても指示を与えることが教員の務めである。このことについて、大学当局はもとより各教員が十分自覚して授業の設計と学習指導を行うことが必要である。同時に、学生の側においても主体的に学習に取り組むことが求められる。」

ECR は、教員がこのような教育方法の改善を効率的に進めて行くために、授業関連情報を学生に電子的に提供する仕組みを提供するサービスである。本学における教育の情報化の推進にもつながり、評価情報の提供にもつながると考えている。

プロジェクトの概要

プロジェクトは、調査、開発、実験、まとめからなる。

1) 調査

調査としては、①国内外の同種のサービス・システムに関する調査、②本学教員へのアンケート調査、③著作権法上の対応に関する調査を行う。①については、ECR システムの機能・仕様調査を行い、プロトタイプとして具備すべき機能等の参考とする。②は調査のなかではもっとも重要なものである。本学教員について、この種の仕組みの利用についての意思や授業関連情報に関して種別、量、保持形態等について調査する。③は、この種の電子サービスでは常に問題となることであるが、文部省は、2002年の学習指導要領の改訂に対応するため、教育目的で著作物をネットワーク利用することに関連して、公衆送信権、送信可能化権の制限事項を法律に盛り込むための作業を開始している。この動向も見ながら、著作権に関連してどのよう

な条件が ECR に要求されるかを調査する。

2) 開発

このプロジェクトでは、プロトタイプシステムを開発するが、基本的な考え方はオープンソースソフトウェアとすることである。これによって他機関で、同種の仕組みを検討しているところは、本学が開発したシステムを自由に入手して、使用、修正することが可能となる。そのため、システム構築にあたっては以下の基本構成を採用する。

- OS: Linux
- データベース: MySQL
- Web サーバ: Apache (PHP モジュール)
- スクリプト言語: Perl

3) 実験

教員と協力してプロトタイプシステムを使用して、実際の運用を行い、システム及び運用方法の評価を行う。

4) まとめ

調査結果のまとめ、プロトタイプシステムの概要、実験と評価について報告書を作成する。

プロジェクト実施体制

1) プロジェクトチーム

プロジェクトの作業グループであり、本館、分館、研究所図書室の図書館職員 6 名で構成している。

2) アドバイザリグループ

本学教員及び調査研究室員 5 名で構成。プロジェクトの個々の作業について助言をいただくことにしている。

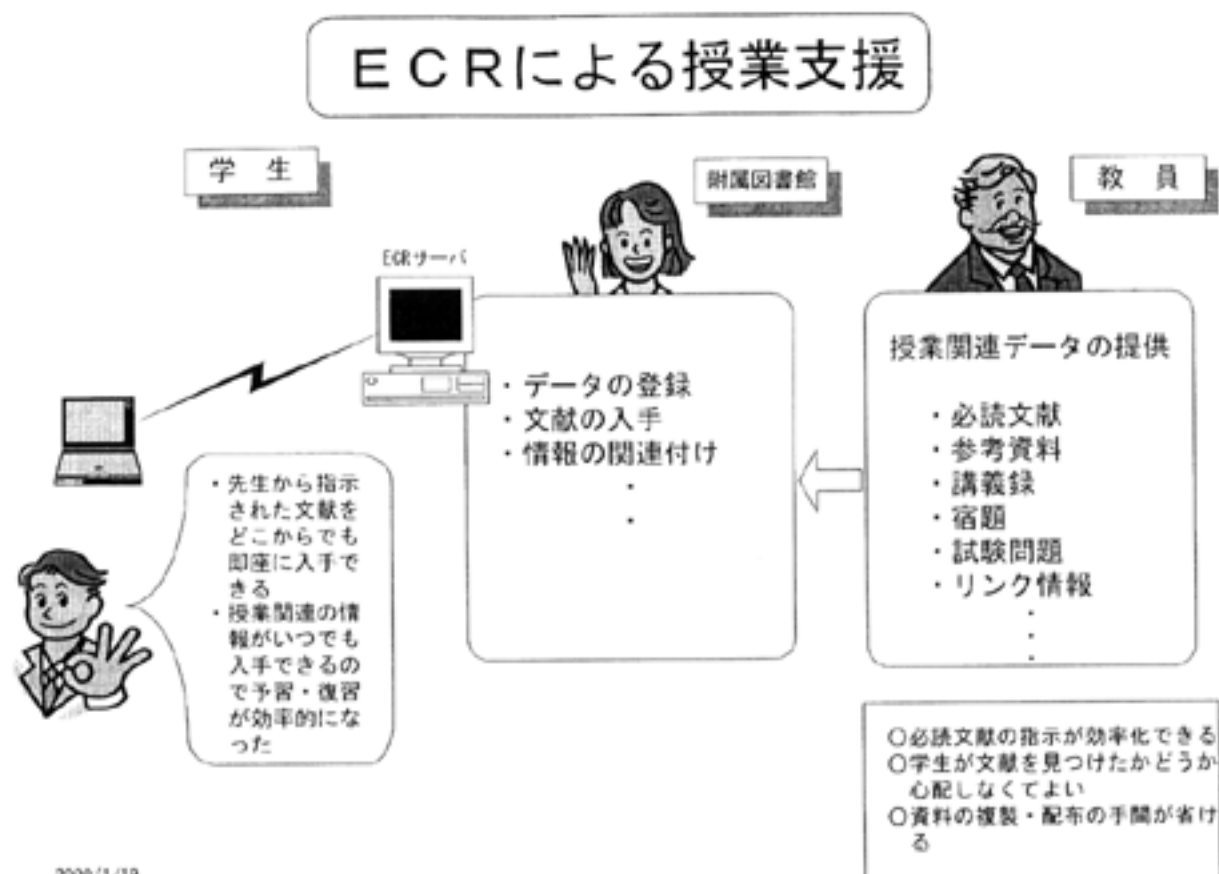
おわりに

以上、事業の概要を紹介したが、事業そのものはまだアンケート調査の準備とプロトタイプシステムの仕様を作成している段階である。今後アンケート、実験・評価など教員の方々の協力が不可欠の作業が続くことになる。ご協力をお願いする次第である。

なお、プロジェクトの進捗状況や関連情報については、以下のホームページをご覧ください。

ECR プロジェクトのホームページ:

<http://gassan.library.tohoku.ac.jp:8000/ecr/ecr.html>



2000/1/19

第31回国立大学図書館東北地区協議会総会

標記会議が4月20日（木）・21日（金）東北大学を会場として東北地区7大学より27名が参加して開催され、次の協議題について討議が行われた。

- 1) 第47回国立大学図書館協議会総会に向けての準備事項等について
 - 2) 第30回（昨年度）の本協議会において地区連絡館が検討することとされていた事項について
 - 3) 大学図書館における電子的授業支援サービスについて
 - 4) エルゼビア・サイエンス社の雑誌価格問題について
 - 5) 「教官当積算校費等の改善」に対応した図書館予算の考え方について
 - 6) 次期当番館について
- その結果、次のとおり決定した。
1. 文部大臣等に対して特に要望すべき事項
 - (1) 資料共同利用センター（仮称）の整備

- (2) レファレンスデータベースの整備
- (3) 図書館業務合理化経費の増額
- (4) 学生用図書購入費の増額
- (5) その他の改善事項

2. 総会の分科会で検討するための協議題

- (1) 「教官当積算校費等の改善」に対応した図書館予算の考え方について
- (2) 大学図書館における授業支援サービスの在り方について

なお、平成12年度理事候補館及び所属部会並びに地区連絡館がそれぞれ次のとおり選出された。

理事候補館

- 秋田大学附属図書館（第1部会）
- 東北大学附属図書館（第2部会）

地区連絡館

- 東北大学附属図書館

（総務課）

海外電子図書館機能調査記

情報サービス課長	早	瀬	均
情報管理課	横	山	美佳
工学分館	高	橋	菜穂子

はじめに

平成12年5月31日から6月8日までの9日間、本年度の海外の大学図書館における電子図書館機能調査として、アメリカの大学図書館のデジタル化状況について調査をする機会を得た。

本学図書館では、昨年度『東北大学附属図書館の将来構想』を作成し、長中期的な将来計画を策定したが、そのなかで、データベースや電子ジャーナルのような電子的情報資料の整備、貴重資料等の資料電子化の推進、利用者サービスにおける電子化の推進等、図書館活動の様々な側面におけるデジタル化を提言している。これらについて今後実施計画を策定するにあたり、海外の大学図書館でどのような取組がなされているかを調査することが今回の訪問の目的であった。

以下は、今回の訪問で実際に見、意見交換をするなかで印象に残った事柄を紹介するものである。

訪問機関と調査内容

1) 訪問機関

今回調査のため訪問したのは、以下の4機関5図書館である。

- ・ニューヨーク大学 (NYU) Bobst 図書館
- ・ラトガース大学 Alexander 図書館
- ・コロンビア大学 Butler 図書館, Lehman 図書館
- ・ピッツバーグ大学 Hillman 図書館

2) 調査内容

調査項目の概略を以下に挙げる。

- ①資料のデジタル化について (対象, 優先順位, 使用システム, 採用データ構造, 担当, 経費, 提供方法等)
- ②電子的資料の収集について (収集方針・基準, 経費, コンソーシアム, メタデータ等)
- ③電子リザーブ, またはコースリザーブについて (現況, 使用システム, 担当, 経費, 対象資料, 著作権関連等)
- ④デジタル化関連施設について

今回訪問した大学では、それぞれ中長期計画を作成している。ラトガース大学では A bridge to the future: digital library initiative (1999年3月, 5カ年計画), コロンビア大学では Investing in the future of Columbia's libraries and Academic Information Systems (6カ年計画), ピッツバーグ大学では Information technology plan (2000年2月) を発表している。これらは上記の調査項目と関連していずれも大変参考になるものである。但し、彼我に環境条件の違いがあることは念頭においておく必要があろう。

資料のデジタル化

1) 電子図書館プロジェクト

資料のデジタル化については、それぞれの大学で積極的に進められている。その殆どがプロジェクトとしての取り組みである。ラトガース大学では Electronic New Jersey 以下10以上のプロジェクト, コロンビア大学では Digital Scriptorium や Metadata 以下20以上, ピッツバーグ大学では Historic Pittsburgh collection 等がある。デジタル化がプロジェクト型で進め

られているのは、それらがまだ運用面・技術面からみて実験的であることにもよるであろうが、そのような実施形態が要請されてるからでもないだろうか。デジタル化の対象となる資料の内容や評価、それらをどのような形式で蓄積するか、またどのような情報技術によって処理し、提供するか、これらはそれぞれ関連の研究者、図書館職員、情報技術者の連携で適切な取組みが可能となる。また、連携は大学内にとどまらない。例えば、ラトガース大学図書館の New Jersey Environmental Digital Library は、州政府の環境保護部等との共同プロジェクトである。

ここで思い出すのが、コロンビア大学の図書館長で大学全体の情報サービス担当副学長でもある Elaine Sloan さんの話である。Sloan さんは、現在のように変化の激しい時代には、これがベストであるという組織はありえない、むしろ、変化に即応して必要な人材を集めて事業を進めるプロジェクト型が有効であり、それがコロンビア大学に相当な数のプロジェクトがある所以である、という。因みに、Sloan さんの副学長ポジションについて、規程のようなものはないかとの質問には、そのようなものはない、自分の権限も不変ではないのだからとの答が返ってきた。



(コロンビア大学 Sloan 副学長・図書館長と)

2) データ構造の標準化と共有

ピッツバーグ大学の Historic Pittsburgh collection は、そのデータベース構築過程も興味

深い。担当の Elizabeth Shaw さんの説明にしたがってその手順を示す。

- ①イメージデータ作成：対象となる資料をイメージスキャナーでスキャンする。解像度は600dpiである。この画像イメージのハードコピーから複製本を作成している。
- ②OCRによるテキスト化：イメージデータをOCRでテキスト化する。
- ③メタデータの作成：目録データから書誌事項を自動抽出し、メタデータを作成する。
- ④メタデータと②で作成したテキストデータをEAD(Encoded Archival Description: SGML 文書)の形式にする。
- ⑤SGML対応の全文検索エンジンで検索可能とする。

このプロジェクトには、ミシガン大学図書館等との共同プロジェクトで共有された技術が使われている。各大学での取り組みが共有されている好例といえよう。

上記 EAD は議会図書館とアメリカアーキビスト学会 (Society of American Archivists) が開発したコレクションについての構造化文書記述形式で、今回訪問した大学では、コレクションガイドである finding aid (蔵書紹介・案内) にはこの形式を採用しており、finding aid の



(ピッツバーグ大学 Brody 副館長, Shaw さんと)

標準記述形式である。

また、コロンビア大学では、メタデータについてのプロジェクトが進行中である。メタデー

タとしては、DCMI(Dublin Core Metadata Initiative)が知られているが、これを拡張して使用しているところが多いようだ。コロンビア大学では、ミシガン大学等が作成したメタデータをメタデータマスターファイル(MMF)に自動取り込みできるような変換表も検討されていた。

電子的情報資料の収集

1) 選定・受入

米国の大学図書館は、図書館独自で資料費を持っている。これがわが国の大方の国立大学図書館と異なるところである。それ故今回訪問した大学図書館の2次情報データベースや電子ジャーナルの充実ぶりは相当なものだ。どのような電子的情報資料(ER: Electronic Resources)が導入されているかについては、ホームページで確認できるので、今回は、主としてその選定の基準・プロセスについて話をうかがった。

ER選定の基準は、図書館の選定基準に情報技術的な要素を追加したものといえることができる。アメリカの図書館ではもう10年以上もCollection Development(蔵書構築)やCollection Management(蔵書管理)の実績があり、この間に図書・雑誌の選定基準・方針が確立された。因みに、NYUのホームページには45の分野について選定方針が掲載されている。

ERについては、選定方針以外に選定のプロセスも重要となる。選定のプロセスについては、どの大学でもしっかりした手続きが定められていた。例えば、ラトガース大学では、蔵書構築委員会(Collection Development Council)の下に置かれている4つのチーム、すなわち人文科学、理工学、社会科学、全般チームが選定と評価を行うことになっている。また、ピッツバーグ大学では、図書館員数名からなるNRWG(Networked Resources Working Group)がその役割を担っており、ERの受入から提供までの手順が細かく決められている。

今回の調査項目には、ERの導入「経費」も

含まれていたが、経費については深刻な悩みはないようだ。コロンビア大学の収書担当副館長のAnthony Fergusonさんによると、コロンビア大学では毎年資料費が10%増額されているとのことである。したがって雑誌価格が年7%上がっても、残り3%は他に使えることになる。アメリカ経済の景気のよさとドル高の恩恵とのことだったが…。ただ最近ではdigital creep(?)といわれる現象が見られ、ER予算は余り増えず、冊子体特に図書予算が増加する傾向があるとのことだった。

2) コンソーシアム

アメリカでは、電子化情報資料を導入する際にコンソーシアム契約を利用するのが一般的だ。NYU、コロンビア大学、ラトガース大学はNERL(North East Research Libraries)のメンバーであるし、ラトガース大学とピッツバーグ大学はPALINETのメンバーである。これらのコンソーシアムは、その活動の中にメンバー図書館のために、できるだけ有利な条件でERを導入することを挙げている(electronic content licensing)。コンソーシアムによる集団圧力をcollective buying powerというらしいが、コンソーシアムを形成する利点についてはどの大学も異論はなく、1つの大学が複数のコンソーシアムのメンバーになっており、もちろんこれらのコンソーシアムはICOLC(International Coalition of Library Consortia: コンソーシアムのコンソーシアム)にも参加している。

また、4大学ともARLのSPARC(Scholarly Publishing and Academic Resources Coalition)当初メンバーである。

電子リザーブ・コースリザーブ

調査項目の3番目は、本学でプロジェクトが進行中の電子的授業支援に関連するものである。訪問した4大学のうち、現在電子リザーブ(ECR: Electronic Course Reserves)を大学全

体として実施しているのはラトガース大学だけで、NYU は音楽図書館で実施、コロンビア大学の Lehman 図書館は計画中であった。

NYU では、ECR は実施していないが、コースリザーブ担当の Albert Neal さんはデラウェア大学で ECR を実施した経験があり、その経験を含めていろいろ話を聞くことができた。また、コロンビア大学の Jeff Rosedale さんは、ARL (Association of Research Libraries: アメリカ研究図書館協会) の ECR フォーラムの編集顧問をやっている方でアメリカの ECR 状況に詳しいことから、会う機会を作っていただいた。



(コロンビア大学 Lehman 図書館
のリザーブデスク内)

*コースリザーブは、文献、講義録、シラバス、宿題、試験問題等の授業関連資料を教員の指示により、別置して保管しておき（通常はリザーブデスク内に）、学生の利用に供するもの。利用が集中するために利用時間は2時間程度に限られる。電子リザーブは、コースリザーブの電子版サービス。

1) 電子リザーブ

ECR はその言葉自体が矛盾であるとは Rosedale さんの言葉である。授業で使用する資料を物理的にリザーブデスクの内側に「取って(リザーブして) おき」、貸出時間を短くすることで集中的な利用に備えるのが、「リザーブ」であれば、そのような物理的バリアをなくしよう

とするのが ECR であるからだ。ECR は、現状のコースリザーブの物理的な制約からくる諸問題を解消するものとして期待されているが、移行は必ずしも容易ではないようだ。NYU の Neal さんは、コースリザーブのすべてを ECR に置きかえるのは難しいという。先ず処理量の問題がある。Neal さんからいただいた社会事業学校 (School of Social Work) の1科目のリザーブリスト (教員がリザーブを申請する文献のリスト) には54の文献が含まれている。コースリザーブを利用する教員は500名を超えているからその処理量は想像がつく。しかもそれが学期前1ヶ月に集中するという。

ECR の新たな課題としては、著作権上の問題がある。今回の訪問ではあまり話題としなかったが、ECR 実施の環境条件を決める要因のひとつである。

2) ECR システム

今回の訪問では、ECR システムとしてどのようなシステムがあり、使われているかということも我々のプロジェクト調査とも関連して知りたかった。現状では次の4つに区分できそうである。

①専用システム

米国以外でも多くの大学で導入しているのが Docutek 社の ERes というシステムで、現在のベストセラーである。

②図書館自動化システム

Voyager (Endeavor Information System) や Unicorn (SIRSI) 等は図書館システムの中に ECR のモジュールを持っている。ラトガース大学は後者を導入している。

③電子ジャーナル業者

旧 UMI が提供する ProQuest Direct (全文データベースと2次情報データベースを統合したもの) とリンクして文献を手でできる SeitBuilder というシステムがある。コロンビア大学の Lehman 図書館が導入を計画していた。

④独自システム

各大学が独自に開発したシステムで、ジョージメイソン大学の OSCR や南イリノイ大学の Free Reserves というシステムが知られている。ともにフリーソフトウェアで、OSCR は本学の「ECR プロジェクト」のプロトタイプシステムに採用することになっている。

ECR は上記のような課題があるが、各大学において種々の取り組みが行われている。その情報は、ARL が運用する電子フォーラムにおいて入手することが可能で、Rosedale さんは情報を共有するためにそのフォーラムに参加することを勧めてくれた。

デジタル関連施設、改修・再構成、収蔵施設

1) ラトガース大学図書館 SCC

電子化情報資料や PC 関連のハードウェア・ソフトウェア、情報リテラシー教育のための施設・設備を整備し、教育研究の利用に供することを大学図書館の重要な機能と考え、対応した施設・設備を館内に設置することは以前から実施されている。SCC (Scholarly Communication Center) の特徴は、これらの機能、施設・設備等を統合することにより、効果的かつ高度なサービスが可能となっていることだ。SCC は、「人文社会科学データセンター」、「情報処理ラボ」、「遠隔会議ホール」から構成されており、ラトガース大学図書館デジタル化推進の中心施



(ラトガース大学図書館 SCC のデータセンター)

設で研究開発機能も持っている。わが国では大学における情報基盤整備のための組織改編が進んでおり、そこに電子図書館機能を含むケースが多い。今後の展開を考える際に SCC の活動は実際にある好例であると思われた。

2) 施設の改修・再配置

アメリカの大学図書館では大規模図書館の改修・再配置が続いているが、今回訪問したコロンビア大学においても大規模な改修計画が進行中であった。中央図書館の Butler 図書館は 1995 年から改修工事を行っており、われわれが訪問した 6 月は丁度第 2 期工事が完了したときだった。ほぼ 70 年を経た建物はオリジナルの雰囲気保持しつつ見事にインテリジェント化されていた。対照的と思われたのは、参考図書室と貴重図書展示室である。高い装飾天井にシャンデリア、オークの書棚で囲まれた参考図書室はまた情報アクセスのための PC とすべての閲覧席に情報コンセントが備えられているインテリジェントスペースでもある。一方貴重図書展示室は、貴重図書という古い資料のイメージとは対照的に色調も照明も明るかった。デジタル化関連施設としては、他に Media Center, Electronic Text Center, Conference Room 等が改修・整備されている。7 月からは第 3 期工事が開始される。



(コロンビア大学 Butler 図書館参考図書室)

3) 共同収蔵施設

増えつづける資料の収蔵スペースについての悩みは共通しているようだ。とくに大都市

ニューヨークでは遠隔収蔵施設の計画が上っていた。これのお手本は、ハーバード大学とMITの共同収蔵施設である。コロンビア大学は、すでに学外2ヶ所に収蔵施設を確保しているが、ニューヨーク公共図書館、プリンストン大学と共同でプリンストン大学構内に巨大な収蔵施設を建設する計画をもっている。計画中の収蔵施設は4つのモジュールからなり、1モジュールで200～250万冊が収蔵できる。将来はさらにもう6モジュール追加することも考えている。NYUも他機関と共同で収蔵施設を学外（おそらくニュージャージー州）に建設する計画を持っていた。

おわりに

アメリカの大学図書館のホームページは充実しており、かなり詳しい情報を入手できる。しかし、実際に訪問して、担当の方からいろいろ

話を聞いてはじめて得られる情報が多いことも改めて実感した。

今回の訪問で、多くの方々にお世話になった。短い期間にこれだけの調査が可能であったのは、それぞれの機関で、誠に適切なスケジュールを作成していただいたことと訪問にあたって種々の便宜を図っていただいたことによる。NYUのAnn Hardingさん、Lucinda Covert-Vailさん、ラトガース大学の外山良子館長、Thelma Tateさん、コロンビア大学のKarin Ngai-Crimさん、Jeff Rosedaleさん、ピッツバーグ大学の野口幸生さん、Fern Brodyさんには特にお世話になった。記して感謝申し上げます。

また、多忙な時期にこのような海外調査の機会を与えていただいた小田館長をはじめ館員の方々に感謝申し上げます。

（はやせ・ひとし、よこやま・みか、たかはし・なおこ）

平成12年度システム地域講習会が開催された

附属図書館では、国立情報学研究所（旧：学術情報センター）との共催で、毎年システム地域講習会を開催しております。

本年度は、目録システム（図書コース、雑誌コース）講習会（目録システム業務担当職員にシステムの運用に関する知識・技術の講習）、ILL講習会（相互貸借業務担当職員にILLシステムの運用方法及び端末操作等に関する知識・技術の講習）並びにNACSIS-IR講習会（代行検索担当者及び情報検索サービス利用者に知識・技術の講習）の4つの地域講習会を対象としています。（NACSIS-IR講習会については、昨年度から「新IR対応」となって、本年度は9月26日（火）の午後から情報処理教育センターを会場として実施の予定）

会場は、端末機を装備している本館2号館の研修室を利用し、講習期間は2～3日間で、その間に、それぞれの講習会の「システムの概論」、「端末操作解説」、「システムの実習」等の科目をカリキュラムに沿って、本館・分館等の職員が講師・講師補助者となって、これまでの業務上の経験並びに最新の情報に基づき、講義・実習が行われました。

受講生は、東北地区の大学、研究機関及び高等専門学校の附属図書館から推薦された図書館職員で、各講習会12名ずつの参加がありました。

それぞれの講習会とも講師等の熱心な指導と受講生のまじめな受講姿勢が相俟って充実したものとなり、受講生からは感謝の意を述べた感想が寄せられております。



（熱心な受講風景）



（修了証書が交付された）

（総務課）

附属図書館商議会商議員名簿

平成12年7月1日現在

所 属	氏 名	任 期
図 書 館 長	小 田 忠 雄	官 職 指 定 (9.12. 1～12.11.30)
医 学 分 館 長	飯 沼 一 宇	官 職 指 定 (11.12. 1～13.11.30)
北 青 葉 山 分 館 長	吉 藤 正 明	官 職 指 定 (11. 4. 1～13. 3.31)
工 学 分 館 長	宮 崎 照 宣	官 職 指 定 (12. 4. 1～14. 3.31)
農 学 分 館 長	折 谷 隆 之	官 職 指 定 (11. 4. 1～13. 3.31)
事 務 局 長	北 村 幸 久	官 職 指 定 (12. 7. 1～)
文学研究科教授	才 田 いずみ	(12. 4. 1～13. 3.31)
教育学研究科教授	宮 腰 英 一	(11. 4. 1～13. 3.31)
法学研究科教授	柳 父 罔 近	(12. 4. 1～14. 3.31)
経済学研究科教授	猿 渡 啓 子	(11. 4. 1～13. 3.31)
理学研究科教授	倉 本 義 夫	(11. 4. 1～14. 3.31)
医学系研究科教授	里 見 進	(11. 4. 1～14. 3.31)
歯学研究科教授	加賀山 学	(11. 4. 1～13. 3.31)
薬学研究科教授	後 藤 順 一	(12. 4. 1～14. 3.31)
工学研究科教授	米 本 年 邦	(12. 4. 1～13. 3.31)
農学研究科教授	大 森 迪 夫	(11. 4. 1～13. 3.31)
国際文化研究科教授	浅 野 裕 一	(12. 4. 1～13. 3.31)
情報科学研究科教授	西 関 隆 夫	(11. 4. 1～13. 3.31)
金属材料研究所教授	平 賀 賢 二	(12. 7. 1～13. 3.31)
素材工学研究所教授	藤 野 威 男	(12. 4. 1～13. 3.31)
加齢医学研究所教授	貫 和 敏 博	(8. 4. 1～13. 3.31)
科学計測研究所教授	水 崎 純一郎	(12. 4. 1～14. 3.31)
流体科学研究所教授	山 崎 義 武	(12. 4. 1～14. 3.31)
電気通信研究所教授	矢 野 雅 文	(10. 4. 1～14. 3.31)
反応化学研究所教授	宮 下 徳 治	(12. 4. 1～13. 3.31)
東北アジア研究センター教授	入間田 宜 夫	(12. 4. 1～14. 3.31)
遺伝生態研究センター教授	津 田 雅 孝	(12. 4. 1～14. 3.31)
大学教育研究センター教授	関 内 隆	(9. 4. 1～13. 3.31)
言語文化部教授	足 立 美比古	(12. 4. 1～13. 3.31)

人 事 異 動

平成12年 6 月30日現在

発令年月日	新 官 職	氏 名	旧 官 職	備 考
11. 11. 30	医学分館長	高 坂 知 節	医学分館長	任期満了
11. 12. 1		飯 沼 一 字		併 任
12. 2. 29		久保田 和佳子	事務補佐員 (医学分館整理掛)	辞 職
12. 3. 1	事務補佐員 (医学分館整理掛)	川 口 絵 美		採 用
12. 3. 30		花 岡 吉	事務補佐員 (北青葉山分館整理・運用掛)	任期満了
12. 3. 31		本 間 基 文	工学分館長	任期満了
"	工学分館整理・運用掛長	京 極 菊 子	工学分館整理・運用掛長	定年退職
"		木 村 元 子	文部事務官 (工学分館整理・運用掛)	辞 職
"		土 屋 鈴 子	事務補佐員 (医学分館整理掛)	任期満了
"	事務補佐員 (医学分館整理掛)	菊 地 友 信	事務補佐員 (医学分館整理掛)	"
"		加 納 雅 行	事務補佐員 (医学分館運用掛)	"
12. 4. 1	工学分館長	宮 崎 照 宣		併 任
"	京都大学附属図書館総務課長	由 良 信 道	附属図書館情報管理課長	転 出
"	附属図書館情報管理課長	三 池 愼三郎	名古屋大学附属図書館情報サービス課長	転 入
"	岩手大学附属図書館図書館専門員	菊 地 房 雄	情報管理課雑誌情報掛長	転 出
"	学務部学生課専門職員	馬 淵 信 武	総務課庶務掛長	配 置 換
"	総務課庶務掛長	高 橋 正 平	学務部厚生課専門職員	"
"	加齢医学研究所経理掛長	葛 巻 進	総務課会計掛長	"
"	総務課会計掛長	武 田 浩	工学部等事務部経理課管理掛長	"
"	情報管理課雑誌情報掛長	湯 本 智 子	農学分館図書掛長	"
"	宮城教育大学学生課専門職員	廣 木 貞 男	医学分館総務掛長	転 出
"	医学分館総務掛長	佐 藤 青 史	科学計測研究所庶務掛長	配 置 換
"	農学分館図書掛長	相 川 晶 子	北青葉山分館・整理運用掛長	"
"	北青葉山分館整理・運用掛長	菅 原 淑 子	文部事務官 (情報サービス課相互利用掛)	昇 任
"	工学分館整理・運用掛長	森 脇 ち か	文部事務官 (金属材料研究所総務課図書掛)	"
"	文部事務官 (情報管理課受入掛)	藤 澤 こず江	文部事務官 (工学部マテリアル・開発系科学科事務室)	配 置 換
"	文部事務官 (情報サービス課参考調査掛)	菅 原 透	文部事務官 (工学分館整理・運用掛)	"
"	文部事務官 (情報サービス課相互利用掛)	湯 目 昌 史	文部事務官 (情報サービス課閲覧第二掛)	"
"	文部事務官 (医学分館整理掛)	三 浦 純 子	文部事務官 (医学分館運用掛)	"
"	文部事務官 (工学分館整理・運用掛)	岩 崎 道 子	文部事務官 (医学分館整理掛)	"
"	文部事務官 (工学分館整理・運用掛)	高 橋 菜穂子	文部事務官 (情報サービス課閲覧第一掛)	"
"	文部事務官 (農学分館図書掛)	池 田 智 絵	文部事務官 (情報サービス課参考調査掛)	"
"	宮城工業高等専門学校庶務課図書係	川 崎 恵 美	文部事務官 (情報管理課受入掛)	転 出
"	北海道教育大学附属図書館函館分館	佐 藤 直 人	文部事務官 (農学分館図書掛)	"
"	文部事務官 (情報サービス課閲覧第一掛)	村 尾 真由子		採 用
"	文部事務官 (情報サービス課閲覧第二掛)	木戸浦 豊 和		"
"	事務補佐員 (総務課会計掛)	熊 谷 弘 子	事務補佐員 (情報サービス課閲覧第一掛)	配 置 換
"	事務補佐員 (情報管理課図書情報掛)	菊 地 裕 子	事務補佐員 (医学分館運用掛)	"
"	事務補佐員 (情報サービス課閲覧第一掛)	星 けい子	事務補佐員 (総務課会計掛)	"
"	事務補佐員 (医学分館管理掛)	大 沼 和 子	事務補佐員 (工学分館管理掛)	"
"	事務補佐員 (医学分館整理掛)	堀 籠 かをる	事務補佐員 (情報サービス課相互利用掛)	"
"	事務補佐員 (北青葉山分館整理・運用掛)	鈴 木 くに子	事務補佐員 (北青葉山分館管理掛)	"
"	事務補佐員 (工学分館管理掛)	今 泉 みはる	事務補佐員 (情報管理課図書情報掛)	"
"	事務補佐員 (医学分館運用掛)	田 中 美香子		採 用
"	事務補佐員 (医学分館運用掛)	春 本 樹 里		"
"	事務補佐員 (北青葉山分館管理掛)	佐 藤 理 子		"
12. 4. 17	事務補佐員 (情報サービス課相互利用掛)	渡 部 由美子		"

会 議

◎学 内

12. 5. 15 記念資料室運営委員会

12. 6. 5 記念資料室専門委員会

◎学 外

12. 4. 20～21 第31回国立大学図書館東北地区
協議会総会 (於：東北大)

4. 22 国立大学図書館協議会常務理事会
(於：東大)

5. 23 国立大学図書館事務部課長会議
(於：東京医科歯科大)

5. 24 国立大学図書館協議会受賞者選考委
員会 (於：東大)

5. 24 国立大学図書館協議会著作権特別委
員会 (於：東大)

5. 24 国立大学図書館協議会常務理事会
(於：東大)

5. 25 国立大学図書館協議会理事会
(於：東大)

5. 26 国立大学図書館協議会と国立情報学
研究所との業務連絡会
(於：国立情報学研究所)

6. 28～29 第47回国立大学図書館協議会総
会 (於：金沢大)

お 知 ら せ

○平成12年度総合研修委員決まる

今年度の総合研修委員に下記の5名が選出さ
れた。

この1年間職員のための研修計画と実施に活
躍されることが期待される。

記

前 田 裕 子
日 出 弘
湯 目 昌 史
對 馬 庸 二
菅 原 ちはる

(総務課)

編 集 後 記

20世紀最後の年も早半年が過ぎた。本学では
組織改革の検討が行われており、その中で図書
館も変わっていくことになるだろう。

附属図書館の広報を一手に引き受けている広
報委員会の委員が、任期満了により本年4月か
ら交替しました。

また、これを機会に広報委員会の中に木這子
の編集委員会を設置し、より良い館報を目指し
て努力していきますので、ご協力方よろしくお
願いいたします。

広報委員

東 高明	伊東 正勝	高橋 正平
湯本 智子	菅原 透	三浦 純子
松元 義正	早坂 幸子	佐藤優美子
照内 弘通	横山 美佳	杉山 智章

編集委員

伊東 正勝	湯本 智子	菅原 透
三浦 純子	松元 義正	

東北大学附属図書館報「木這子」 第25巻第1号(通巻90号)発行日 平成12年6月30日

発行人 済賀 宜昭 広報委員長 東 高明

発行所 東北大学附属図書館 仙台市青葉区川内 電話 022-217-5911, FAX 022-217-5909

URL <http://www.library.tohoku.ac.jp/>